

＜中国社会と自生的秩序—リスクと仲介の視点から—＞

＜神戸大学＞ ＜梶谷懐＞

現代の制度派経済学は、外部的（自然）環境がもたらすリスクや不確実性と、経済的な制度およびその他の政治・文化的な制度（人為的環境）、さらには社会における「個人」の位置づけの相互作用と共進化のメカニズムについて考察を続けてきた。その際に忘れてはならないのは、特に後期近代においては、外部環境の不確実性に対処するために作られた人為的環境が、環境破壊や国家の横暴といったそれ自体「個人」の生活を脅かすリスクとなりうる、という点である。

一方、加藤弘之は、中国型資本主義の特質を市場経済における各種の取引が「曖昧な制度」によって支えられている点にあるととらえ、それが世界経済の変動がもたらすリスクに対してある種の柔軟性と意外な強靭さをもつ可能性があることを指摘した。明清期における「客商—牙行」の慣行から、現在のアリババやテンセントが提供する決済システムによって仲介される E・コマースまで、中国の市場経済に通時的にみられる特徴としての、取引における「仲介者」の多さも、加藤の指摘するような「経済の変動がもたらすリスクへの柔軟さと強靭さ」を象徴する事例として挙げられるであろう。

一方で、このような経済取引においてさまざまな「仲介者」が介在する事例は、近代化初期の日本においても広く見られた現象だっただけではなく、発展途上国がグローバル経済に編入される過程で、しばしば観測されるものであり、決して中国に固有の現象というわけではない。では、加藤に対する批判者によってしばしば主張される様に、「仲介者」を通じたリスク回避の制度は、「制度化の遅れ」という単線的な段階論に位置づけられるべきなのだろうか。

本報告は、現代中国社会をめぐる以上のような「リスク」と「制度」との関係、および「特殊性」と「普遍性」をめぐるアポリアに、冒頭で述べたような、リスクの二分的な分類—自然的環境がもたらすリスクと人為的環境がもたらすリスク—の視点を導入することで、従来の議論から一步進めた問題の地平を提供することを試みるものである。